

四日市場村

〔都 留 市〕

四日市場村は、近世以降当村の他、八代郡にもあり、現在は石和町に属する。甲府の三日町・八日町、または巨摩郡十日市場村（若草町）などととも、市が開かれたことによる地名である。いうまでもなく、こうした定期市の開催は、これらの土地が商業活動の地域的中心であったことを示すものであり、多くの場合戦国期にその起源をもっている。

本村も「勝山記」によれば天文二年（一五三三）二月火災にあったが、すでに「四日市ハ」の地名があり、市が開かれていたであろうことを推測させる。なお当地は、田原とともに塩山の向岳寺領であった。天文二十四年（一五五五）の武田晴信書状写によれば、この時「田原・四日市場」の再寄進が行なわれた（向岳寺文書『甲州古文書』一）。

この四日市場村は、桂川と小野川にはさまれた地域にあり、二川の合流部にある古川渡村の南西上流部に続いている。本書所収の「村明細帳」では次のように村絵図について説明している。

上流谷村との境から下流古川渡村の境まで、村内の往還は五八〇間（一、〇四四メートル）ある。東西の町裏には屋敷が続ぎ、そこを小野川・戸沢川の流末である川が流れるが、それは通称「みそぎ川」とよび、その川岸から険阻な山があり、それを「生出山」と言う。この山上に池があり、早魃にも水が絶えることがなかったという。また北西の町裏には、田畑が広がり、桂川が流れている。

この「村明細帳」の絵図解説を読みながら、村絵図をみると、村の様子は一段と理解しやすくなる。『甲斐国志』編纂のために提出された文化七年（一八一〇）のその「村明細帳」によれば、村高四〇二石六斗三合、家数一〇五軒、人数四二八人（男二〇三、女二一五、山伏五、僧二、座頭一、合計合わない）を数え、瀬中を枝郷としていた。ちなみに、昭和五十一年の国勢調査による世帯数・人口は、四二八世帯一八二六人となる。

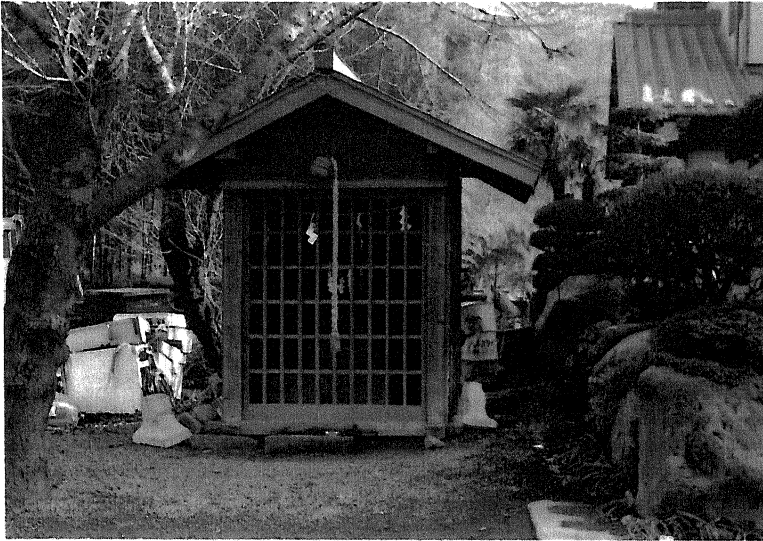


四日市場の家並

その「村明細帳」によると、田高が三二〇石五斗六升七合、畑高が八二石三升六合で、田高が畑高の約四倍あり、田圃のきわめて多い村であったことが知れる。こうした耕地条件のよい四日市場ではあったが、女性は農業の間に蚕を飼い、絹織物を織って生活を補っていた。そして男性は、谷村役所より江戸屋敷への御用状の継送り人足を勤めていた。その数は人足五人・馬一疋であった。なお助郷は、上花咲・下花咲宿へ勤めていた。

先にみた田高三二〇石余の田圃に必要な刈敷肥料の柴草は、自村の山のみからの柴草では足りなかった。そのため、道法三〇町余りの与繩山へ入会う権利を有していた。また、薪などは、与繩よりも遠い朝日村山内と戸沢村山内へ入会う権利があった。

さてこの絵図は、集落中心として誇張気味に描かれている。集落や街道はもっと生出山にせまって描かれるべきであり、そして、桂川と集落との間の広々とした田圃が幅ぜまに描かれている。



市 神

まず集落であるが、技郷「瀬中」を除けば、ことごとく街道の両側に位置している。これは、四日市場村が、「市場」として発展したことによる。この四日市場村は、石高でみるとおり、周辺の村に比べて穀倉地帯と呼べる土地柄であるが、集落は日当りの悪い生出山の山影に集中している。これは、日当りのよいところを農地にあてるためにとられた、昔の人々の知恵である。こうした知恵は、四日市場に限ったことではなく、郡内の村にはしばしばこうした村をみるることができる。

道は、東北部、「古川戸境」から「市神社」のところまでは、ほぼ一直線に描かれていて、現在の国道一三九号線とほぼ一致している。現在の国道は「市神社」のところで曲ることなく、ほぼまっすぐに谷村へと延びている。これが江戸時代は絵図のように、「市神社」のところで左折し、用水路を渡って右折し、水路ぞいに進み、通称ボーゾヤマと呼ばれる山の中腹へ登り、そのまま裾をめぐって深田の深泉院へ至るという道であった。その「市神社」のところには現在公民館があり、その向い側には石碑と灯籠（とうろう）があって確認しやすい。

川は南端に「小野川戸沢流末」と見えるが、この川は生出山下で「御祓川」と名を変えた。だが、現在は菅野川という。なお、北西部の端に「桂川筋」と描かれているのが桂川で、この川が主要河川である。これらの川は共に谷が深く、直接取水することはできない。そのため、遠く十日市場村境の谷村大堰で取水した水を生活用水として、また田の用水として利用してきた。そうした谷村大堰からの用水によって、四日市場村の二八町歩の水田を潤した。この村は郡内であって、古川渡村同様、畑よりも田が多い村であった。ちなみに畑は一〇町六反歩余しかなかった。

寺は二か寺あり、一か寺は絵図のほぼ中央下部に描かれている「保寿院」で、山号を岩生山といい、谷村長生寺末の曹洞宗の寺院である。もう一か寺は御祓川を渡ったところにある清泉寺で、山号を生出山といい、臨済宗の寺である。この二寺はともに現存する。

神社は四日市場の産土神としての生出大神が絵図のほぼ中央部に見える。この社は、四日市場村に限らず、上谷村・下谷村・四日市場村・古川渡村枝郷中島の産土神でもあった。

祭神は建御名方命で、諏訪明神であるが、領主秋元氏の世継願の成就により、出生神社と名を変えた由来がある。「村明細帳」では、この社に小宮五社が有るとしているが、現在は一社しかない。桂川沿いに描か

れている「正一位稻荷」は、現在、桂高校入口近くにあるが、その右端の桂川沿いの「熊野権現」は確認できない。

なお、生出山の中腹には「秋葉権現」が描かれているが、現在は生出神社奥の院、古峯神社・秋葉神社の三社が併置して祀られている。

江戸時代の集落は、農業生産第一に考え、生出山の日陰に集中していたが、現在は地内を中央自動車道が水田の真中を通り、そして富士急行線も通っている。そしてまた、桂川沿いには月見ヶ丘団地が造成されたり、都留第一中学校や桂高等学校ができたことから、一般住宅も急激に増加し、村絵図にみられる村落景観は大きく変貌（へんぼう）し続けている。

右鹿絵図之通相違無御座候以上

文化三丙 寅八月日

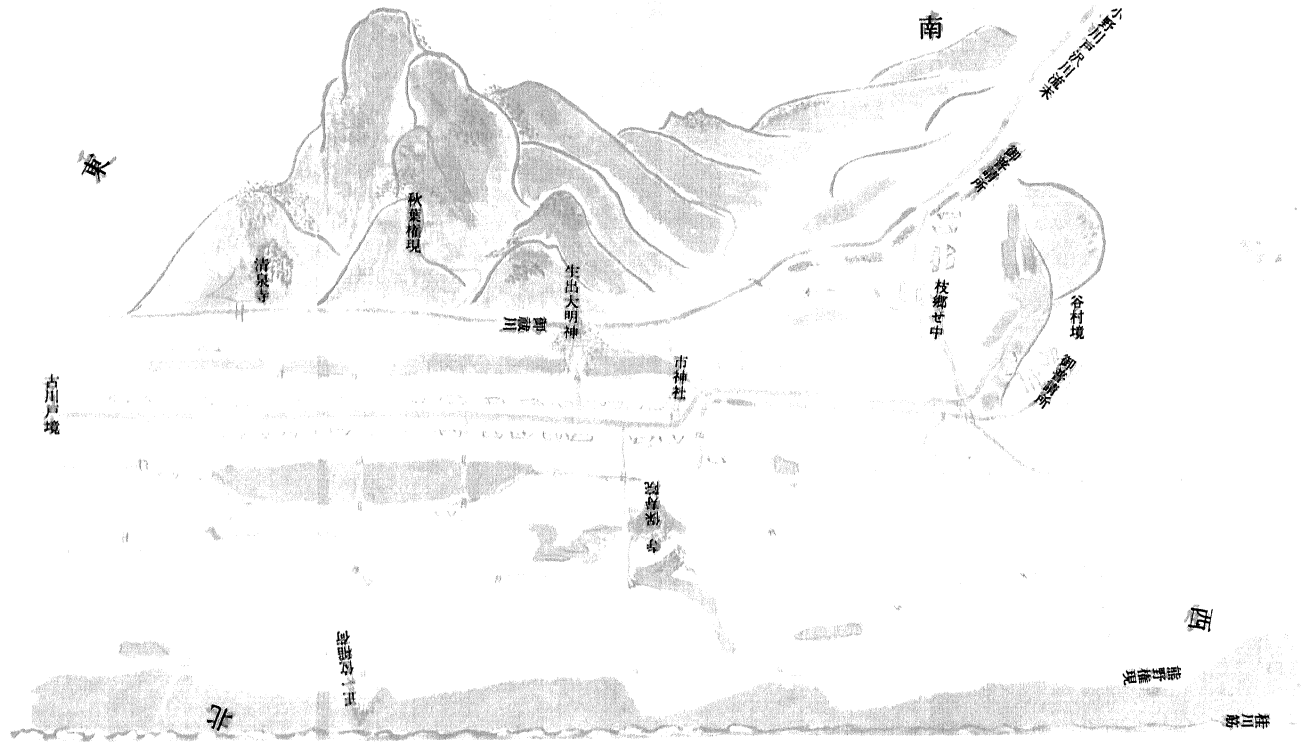
四日市場村

名主兼代

与頭源兵衛

百姓代多郎左衛門

- 色道
- 色川
- 色畑





19 文化3年(1806)8月 四日市場村繪圖 都留市藏(森鳴家文書) 273×725

三 文化七年(二〇)八月 四日市場村村方古来有来明細書上帳

(表紙)

村方古来有来明細書上帳
甲斐国都留郡 四日市場村

甲斐国都留郡

四日市場村

一 籠絵図 壹枚

上は谷村境より下古川渡境迄、往還長五百八拾間、町裏辰巳方屋鋪続き、小野川・戸沢川流末大川有、みそぎ川と唱来り申候、川岸よりけんそにして山あり、名生出山申、此山之戴ニ池あり、何程旱魃之年ニても水絶ゆる事なし、町裏戌亥之方ハ田畑ニ御座候、向岸ニ桂川と申大川有
同郡金井村桂林寺末 生出山清泉寺
一 濟家宗

除地老石六斗六升貳合

本尊薬師如来、行基菩薩之御作

此寺ニ拾ヶ年以前何国ともなく勝軍地藏出現、御馬被召甲冑之御姿、聖徳太子之御作也と申事ニ候
同郡下谷村長生寺末 岩生山保寿院
一 曹洞宗

除地老石七斗五升五合

本尊十一面觀世音菩薩

一 阿弥陀堂 村持氏神之社ニ有之 壹ヶ所
氏神
一 生出大明神 一 社

建御名方命

社領 四石七升七合

(懸) 御閣は正一位大炊御門内大臣之御筆

(私) 御土領之時節は殿様御祈願所、御家中産神ニ御座候、両谷村并古川渡枝郷老ヶ村・当村共四ヶ村之氏

神ニ御座候

一 氏神之社ニ 小宮 五社有

市神之社村之上ニ御座候 古社

一 四日市大明神 (私) 御土領以前迄八月六才之市相立申候

田畑之中ニ森御座候 古社

一 正一位稲荷大明神 小宮社

町裏ニ御座候 小宮社

一 大室権現 小宮社

町上谷村境ニ御座候 小宮社

一 熊野権現 小宮社

枝郷せ中 小宮社

一 山梨大明神 小宮社

一 山神 小宮社

一天神 小宮社

村高四百貳石六斗三合
内田高三百貳拾石五斗六升七合
畑高八拾貳石三升六合
柴米三石壹斗貳合

一 柴秣入会、与繩山内へ入会申候 道法三拾丁余
一 薪諸品入会、朝日村山内へ入会申候 道法四里余
一 右同所入会、戸沢村山内 道法貳里余
一 大助御伝馬は上花咲・下花咲宿両宿へ相勤申候、往返三里余

一 男女農業之間、女子ハ飼蚕并絹紬織物渡世仕候、男之儀ハ農業之間ハ、谷村御役所より江戸御屋鋪御用状継入継出し、井下郡内五十七ヶ村へ之御廻状継出し人足五人・馬貳疋用意いたし、成丈御伝馬相勤申候、其上大助之儀ハ上下花咲両宿へ日々之様御伝馬相勤申候

一 永貳貫八文五歩 浮役金
一 永貳百七拾六文 御伝馬宿入用

一 永六拾文貳歩 口永

一 永四貫貳拾六文 夫金

一 永五文三歩 包永

一 永六貫三百七拾六文

一家数百五軒 馬拾疋

外ニ寺貳ヶ寺

一 人数四百貳拾八人 男貳百三人
女貳百拾七人
内山伏五人
僧貳人
座頭一人

右御尋ニ付、往古より之神社仏閣并云伝へニ有之事奉書上候、以上

文化七庚午八月日

四日市場村

名主 蔵
伴 助
組頭 七郎兵衛
百姓代

松平伊予守様

御役人

○「甲斐国志編纂資料 明細書上書類 村里之部 玄」より。
(富士吉田市 加々美四郎家文書)